

日本海洋科学振興財団

海外渡航費用援助 報告書

2019年 1月 21日

氏名 田中 衛

所属機関(院生は大学院と研究科名) 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科

職名(学生は学年) 博士後期課程3年

渡航期間 2018年12月9日-2018年12月14日

渡航先* ワシントンDC 米国

渡航目的とその成果、感想

American Geophysical Union (AGU), Fall Meeting 2018に参加したので報告する。本ミーティングはホワイトハウス等米政府機関が集中するワシントン中心部にあるウォルター・E・ワシントン会議場にて2018年12月10-14日に開催された。AGUは本年度で100周年を迎えるにあたり「AGU 100 What Science Stands For」と銘打ち、この記念的なミーティングには過去最大規模となる2万4000人を超える研究者・科学者が参加した。私は9日に米国入りして初日となる翌10日から4日間参加し、ポスター発表をした。(口頭発表を希望したが無名の学生にオーラルが回ってくることはかなり稀であると後に聞かされた。)私の発表内容は動物プランクトンについてだったが、ミーティング全体でみるとOceanography 海洋学そのものがマイナー分野としての扱いでありそのうえ動物プランクトンを対象としたものは私の他には数えるほどしかなかった。以前参加したことがあるASLOミーティングと比べるとずいぶん違いである。

私は研究の結果には十分な自信があった。広い目で見れば動物プランクトンは地球システムの一部であるし、とりわけ炭素Cのパスウェイとして重要な働きがある。来て頂いた方には今回の結果がいかに堅実な発見であり、様々なスケールにおける研究(個体レベルから生物地球化学まで)に対して貢献し得ることを丁寧に説明した。なかでも私と同世代とみられるドイツ人風の男性は熱心に話に耳を傾けてくれ、有意義な質問を(ときには批判的な質問も)たくさんくれた。(話が盛り上がりすぎて名前を聞けなかったのが非常に残念である。)AGUのような様々なバックグラウンドを持つ人が大勢あつまる場ではSignificance(意義)を簡潔に(文字どおり短く分かり易く)伝えることが大事であると学んだ。

最後に大会期間を通してお話しが出来た方の名前を挙げる。

Prof Eileen Hofmann (Old Dominion University)

Dr Guillaume Auger (IBM Research)

Dr Cambell Watson (IBM Research)

内山雄介教授 (神戸大)

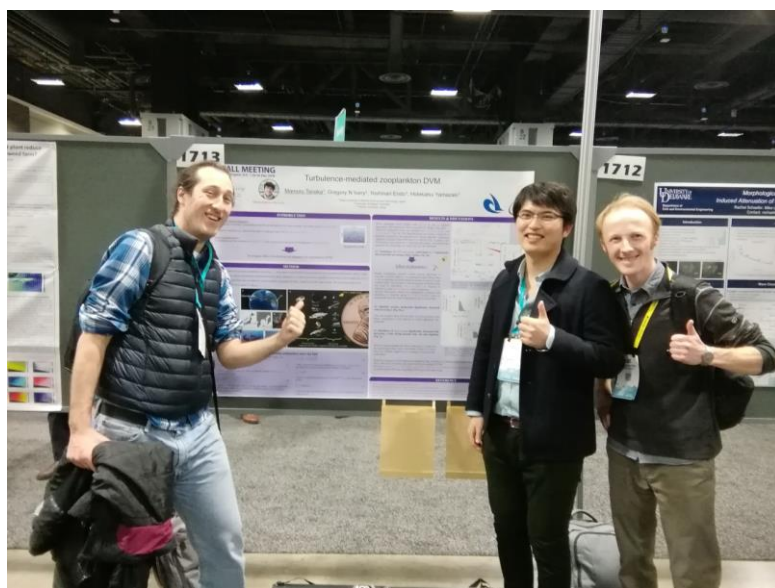
増永英治助教 (茨城大)

Amelia McCarthy (Bryn Mawr College)

Matthew Griffith (Carleton University, Canada)

田中雄大博士 (東北水研)

+名前を聞き逃した方多数



筆者 (中央) のポスター発表。ポスター会場は広く、数千枚のポスターが大会期間を通して毎日張り替えられる。左は IBM Research の Guillaume Auger 博士、右は Carleton University の Matthew Griffith 氏。